

事業主体者

株式会社ユニバーサルワーカーズ

住所 軍艦島デジタルミュージアム：長崎県長崎市松が枝町5-6

電話 095-895-5000

URL <https://www.gunkanjima-museum.jp/>

事業概要

長崎の軍艦島は、正式名称は「端島(はしま)」といい、長崎港から南西に約18kmの沖合に位置している。文化7年頃(1810年頃)に石炭が発見され、明治23年に三菱合資会社の経営となつてから本格的に操業が開始された。最盛期には約5,300人の人々が住み、東京都の約9倍の人口密度を誇つたが、主要エネルギーが石炭から石油へ移行するとともに、出炭量と人口が徐々に減少し、昭和49年に閉山し、無人島となった。その後、長らく島内は立入禁止となつていたが、平成21年に上陸ツアーが解禁されて以降、国内外から多くの観光客が訪れており、平成27年7月には世界文化遺産に登録され、今後さらなる集客が期待される。

軍艦島デジタルミュージアムは、軍艦島を体験できる施設として、上陸ツアー船が就航している長崎港常盤ターミナルから徒歩で数分の場所に平成27年9月に開館し、欠航などにより上陸ができなかった観光客への対応も可能な全天候型の施設となっている。平成30年4月には、国内初となるMicrosoft社のHoloLensを使用したMR(複合現実)による体験コンテンツを新設した。

施設の1階では受付及び関連商品の販売を行っており、2階から4階には、写真・パネル・模型・元島民による解説などのアナログ的手法の特長や、VR・AR・MR・プロジェクションマッピング等のデジタル技術を活かした、全部で28のコンテンツが設置されて

いる。入館料は大人1,800円(団体、年齢に応じた設定あり。長崎県民は半額。)

入館してまず最初に目に入ってくるのが、プロジェクションマッピングを用いた「軍艦島シンフォニー」であり、全長30mのスクリーンに約3,000枚の写真を投影し、当時の様子を元島民による解説とともに、迫力ある映像で確認できる。

そのほかにも、最新のデジタル技術を活用したコンテンツの例としては、プロジェクションマッピングにより実寸の1/150のジオラマに当時のイベントや日常を表現した「シマノリズム」、人の動きに反応して姿を変える軍艦島の水墨画「Wonder Island」などがある。

また、VRを用いたものとして、立入禁止区域に仮想上陸したり、エアロバイクと組み合わせて上空飛行ができる「軍艦島VR」があり、さらにARを用いたものとしては、箱をのぞいてジャンプすると上空から軍艦島を見下ろせる「軍艦島ジャンプ」など、非常に多くのコンテンツを有している。

特にその中でも、HoloLensによるMRを用いた体験コンテンツ「軍艦島のガンショーくん」は、装着して館内を回ると、既存の展示物を拡張した展示鑑賞や当時の島民の様子が見られ、さらに採掘体験ができたりと、魅力のあるコンテンツとなっている。MR体験料は、中学生以上1,000円、小学生(8歳以上)500円。

効果や課題

当施設では、上陸ツアーでは見ることができない立入禁止エリアの様子や、当時の多くの人で賑わっていた島の様子が見られることから、より軍艦島の魅力を体感でき、観光客の満足度の向上が図られている。また、全天候型の施設であることから、欠航により軍艦島へ上陸できなかった観光客の受け皿として機能している。

年間来館数はおおよそ60,000人で、幅広い年代の層が当施設

を訪れており、今後さらなる認知度の向上を目指している。

コンテンツ制作にあたっては、たまたま地元にて技術を持つ事業者等がいたことから、比較的成本を抑え、かつクオリティの高いものを制作することができた。

なお、当施設は軍艦島と密接にリンクしていることから、軍艦島そのもののPR等、自治体との連携が重要となってくる。

事業費

非公開(一部、ものづくり・商業・サービス生産性向上促進補助金を活用)

軍艦島シンフォニー



30mのスクリーンには、約3,000枚の写真を使った映像等が写し出される。

シマノリズム



スクリーンだけでなく、模型にも当時の日常の様子を投影している。

軍艦島のガンショーくん



HoloLensを装着すると、館内に様々なアイテムや映像等が出現する。

